

中国におけるモンゴル民族教育の母語・母語教育の現状と課題

ハスゲレル

東京都立大学大学院人文科学研究科 博士課程

緒 言

本研究の目的は、急激な変化を遂げる中国内モンゴル自治区のモンゴル民族教育の母語・母語教育の現状を明らかにし、今日の問題点と今後のあり方を考察することである。

中国には55の少数民族が住む。少数民族は、全人口の8.4%を占め、それ以外は漢民族である。中国は1949年10月1日に成立して以来、統一された多民族国家と称し、民族の平等と団結を国是としている。モンゴル民族は少数民族のひとつで、中国での人口は480万人前後である。そのうちの380万人が内モンゴル自治区に居住している。内モンゴル自治区以外では、東北三省、新疆ウイグル自治区、青海省などの地域に分散している。中国以外にはモンゴル国、ロシア連邦にあるバイカル湖周辺のブリアード共和国、ボルガ川下流域のカルムイクア共和国などに住んでいる。本研究で取り上げるモンゴル民族とは中国内モンゴル自治区に居住するモンゴル民族を指す。

内モンゴル自治区には二種の学校がある。少数民族学校と漢民族学校である。モンゴル民族学校は、モンゴル語が母語である子どもたちが通い、教育課程は漢民族学校とほぼ同じである。唯一の特徴といえば、モンゴル語の授業があり、教授言語がモンゴル語であるということである。そのモンゴル民族学校では長年漢語がひとつの教科として教えられ、バイリンガル教育が行われてきた。内モンゴル自治区でバイリンガル教育が公式に始められたのは1950年代である。その後「蒙漢兼通」(モ

ンゴル語と漢語の両方に通じる)が打ち出され、モンゴル民族が漢語を身につけることが求められるようになった。文化大革命に至り、民族学校は一時深刻な破壊を被ったものの、その後1978年には全面的な回復の動きが始まった。2000年代になると、グローバル化や中国経済の発展に伴ってモンゴル語と漢語のバイリンガル教育を超えて、人々は英語の必要性を強く感じとり、モンゴル民族学校も英語教育の導入に積極的に取り組み始めた。

英語のニーズの上昇に伴って2001年に中学校から英語が必修化とされた。当初は中学校や小学校5学年からだったが、それが小学3学年から2学年、2学年から1学年へと、学習の開始時期は早期化していった。このような状況において少数民族教育の中で、民族語、漢語、外国語(英語)の三言語を普及させる動きが近年注目を集めている。外国語は、英語、日本語、ロシア語の中からひとつの言語を選択できるようになっているが、漢民族学校も少数民族学校もほとんどが英語を選択している。

2009年度二回にわたり現地調査を行ったモンゴル民族学校では、カリキュラム上では、小学校1学年からモンゴル語、2学年から漢語、3学年から英語の学習が開始されることになっている(表1参照※この表は当該校のカリキュラムを参考にして執筆者が作成したものである。)が、実際は小学校1学年から三言語が始められているのである。1学年の漢語、1・2学年の英語は教科書がなく、会話やゲームなどを中心に授業を行い、子どもたちに言語に対する興味や関心をもたせるようにして

表1 モンゴル民族学校の三言語開始学年と一週間の授業回数

学 年		小 学 校						中 学 校		
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
言 語	モンゴル語	9	8	7	7	7	7	5	5	5
	漢 語		4	4	4	4	4	4	4	4
	英 語			3	3	3	3	5	5	5

いる。

研究方法

研究方法にあたって、モンゴル民族教育における母語・母語教育の実情を明らかにするために、2009年2回にわたり内モンゴル自治区のA市のモンゴル民族学校でインタビュー調査を行った。面接対象者は小中学校の各言語(モンゴル語・漢語・英語)の教師10名と保護者8名である。聞き取りでは事前に調査項目を立て、それを土台にしながら教師や保護者との会話のやり取りを行う「半構造化面接法」の手法を用いた。ヒヤリング時間は教師や保護者の都合に合わせて、30分から1時間、本人の了承を得て音声録音、逐語記録を作成して一次データとした。音声録音を拒否した教師や保護者もいたため、その場合、当時のメモや筆者の記憶を辿って作成した記録を一次データとした。

結果と考察

調査結果から指摘できる第一はモンゴル語の衰退と遊牧生活の激減である。

インタビュー調査を行った教師の多くは、児童・生徒たちのモンゴル語の能力は衰退していると述べている。子どもたちはモンゴル語より漢語が得意になっているという。つまりモンゴル語が衰退していると捉えることができよう。モンゴル語の衰退には自発的と強制的という二つの要因がある。

かつてないほどのモンゴル語衰退の自発的的要因とは、1978年の改革開放や2000年の「西部大開発」戦略の展開の影響である。周知の通り、改革開放以降の中国社会は市場経済化により大転換している。この発展と共に少数民族に大きく影響したのは「西部大開発」である。これは中国の西部少数民族地域と東部地域との経済格差を解決するために、12省自治区を対象に打ち出され、中央主導で進められている一大プロジェクトである。中国政府は、少数民族地域の生活レベルを向上させ、民族の特色や地域文化を強調し、伝統文化に対して誇りを持たせながら、新産業の開発を推進している。このような要因によりモンゴル民族の人々は、経済的な現代化の道筋をたどれず、ひいては時代の歩みからとり残されるという恐れが生じ、遊牧生活を捨て、都市で商業を起こすブームになったのである。都市に出稼ぎにくるようになったのである。内モンゴル自治区と言ってもモンゴル民族の人口は16%しかない。今回、調査を行ったA市

でもモンゴル民族の人口は一割しか占めていない。このように、漢民族が圧倒的に多いことや、都市では漢民族が最も多いため、漢語の使用環境がモンゴル語より多くなり、これがモンゴル語の衰退に繋がったのである。

強制的要因とは、2001年の学校統廃合や2004年の「禁牧」政策(遊牧を禁止する政策)がさらにモンゴル語の衰退に拍車をかけたのである。学校統廃合により町の学校を全部廃棄し、市に集中させたのである。今まで町の学校に通っていた児童・生徒が市の学校に越して来ざるを得なくなった。また「禁牧」によって遊牧民たちは家畜を飼えなくなり、草原を失い、遊牧生活を失って、余儀なく都市で生活するようになった。

遊牧生活の激減が、モンゴル民族の学校教育にも大きく影響を与えたのである。教師たちがいうように、モンゴル民族のことばや文化が危機に陥っているのである。また保護者たちは自分の子どもをモンゴル語より漢語が好きになっているというように、モンゴル民族学校で唯一モンゴル民族の特徴をもつモンゴル語の授業が不人気になっているのである。自発的と強制的に遊牧生活を捨てざる得なくなることによって、モンゴル語が激減しているのである。

調査結果が示す第二の事実は、漢語のモノリンガル化である。

漢語モノリンガル化の進行は、自発的と強制的という二つの要因によるモンゴル語の衰退として現れている。モンゴル語の衰退と同時進行のかたちで漢語モノリンガル化が進んでいる。

長年モンゴル語教師として教壇に立っている教師たちはモンゴル民族学校の児童・生徒はモンゴル語よりも漢語で思考するようになり、漢語モノリンガル化が増加していると語っている。市で育った成長途上期の児童・生徒に漢語モノリンガル化が目立つという。モンゴル語の情報よりも漢語が圧倒的に多いので、子どもは漢語を好むという。一番好きな言語が漢語になってきている。漢語モノリンガル化には世代格差があり、とりわけ若い世代で顕著になっている。この漢語モノリンガル化の進行には、遊牧生活の減少と都市化に伴うものではあるが、それ以外にもうひとつの背後の要因は、中国政府が今までモンゴル民族に対して行ってきたバイリンガル教育政策である。中国政府は1949年以降、学校教育を通してモンゴル語と漢語のバイリンガル教育を行ってきた。そのバイリンガル教育は「蒙漢兼通」のスローガンで行われていたが、しかし過剰な漢語重視の結果が今日の漢語

モノリンガル化現象になってしまったのである。

要 約

近年の近代化、工業化、都市化の進行がモンゴル民族の生活にも大きく影響をもたらしている。モンゴル民族の伝統的な住まいであるゲルはレンガづくりの家にかわり、バイクや車がモンゴル民族の従来の交通手段であった馬にとって変わった。草原では「禁牧」政策により、従来の放牧が困難になり、出稼ぎなどで都市へ移動する遊牧民が増えた。民族学校も統廃合が次々と進められ、民族教育の基礎的な役割を果たしてきた遊牧地域の学校が減りつつある。これまで生活体験の中で自然に民族文化を身につけていた遊牧地域の子どもの多くが都市に移り、都市での学校生活を余儀なくされている。調査から明らかになった「モンゴル語の衰退と漢語モノリンガルが急増」はモンゴル民族教育にかつない現象とも言えよう。

それはモンゴル民族の人々は自発的と強制的に遊牧生活を捨てざるをえなくなったため、遊牧文化と密接に発達してきたモンゴル語の語彙が子どもの生活実態とそぐ

わなくなり、子どもの想像力をかき立てるような教材もできず、現実の力関係で漢語と英語、それに並んでモンゴル語という意識になってきているのである。このような現状でモンゴル民族は、モンゴル民族教育のなかでモンゴル語やモンゴル民族の文化をいかに継承していくかが、今後の課題である。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜りましたこと、あつく御礼申し上げます。貴奨励金の賜ったお陰で、内モンゴル自治区のモンゴル民族教育の現状を本報告書にまとめる機会を与えて頂き、心から感謝しております。

文 献

- 1) 小柳正司ほか:「中国内モンゴル自治区における民族語教育の現況」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』, 17, pp101-107, 2007.
- 2) ゴイハン:「内モンゴル自治区におけるトライリンガル教育—少数民族学生の母語能力への影響を中心に」『格差センシティブな人間発達科学の創成 公募研究成果論文集』, pp65-75, 2008.